
最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話

【Nコード】

N3362T

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

ゴミクズな男が魔法先生ネギま！の世界で非道の限りを尽くし、酒池肉林生活を楽しみます。

【 注意 】

この作品は、気分転換に欲望全開の駄文を書く目的で作られています。そして『最低』要素が満載です。18禁になるかならないかのギリギリを追求していますので、管理人から警告メッセージが来たら1ヶ月以内に削除および修正をします。

OP 1

「げふっ、んだよ、このオリ主。幸せがなんだとか言っでないでエロ見せるエロをつ」

カーテンどころか雨戸も締め切った真っ暗で悪臭漂う部屋。

その中に居るボクちゃんは、パリポリとチップ菓子を食べながら、脂ぎった手でマウスを操作していた。

手垢でベタベタな最新型のノートパソコンに映っているのは、とある二次創作小説の投稿サイト。

友人という名の下僕から「18禁じゃなくても面白いのがあるよ」と勧められて読んでみてみたんだ。

だけど、ボクちゃんには低レベル過ぎるね。

やっぱりストーリーとかテーマ性とか言っている下僕の言う事なんか聞くんじゃなかった。

そう思いながらお菓子の袋に手を伸ばすが、隅まで探しても一つまみしか残っていなかった。

袋を傾けて、わずかな残りを口に流し込み、右手の指を全部舐める。

菓子が全部切れていたのだ。

「ぐあああ…メンドクセエ……でも仕方ないから口 ソン逝くか
あ…… よっこらせっ」

それは菓子が切れたらコンビニに行く、いつもの習慣。

その最中にたまたま近くで転んだ少女が、とっさにボクちんを掴んだ。
だ。

ただそれだけのこと。

どうせすぐに悲鳴をあげて逃げられる。

そう思っていた。

でも、それが……。

ボクちんの運命を、大きく変えることになるのだった。

OP 2

少女に腕を掴まれた瞬間、ボクちゃんの中に何かが入ってきたんだ。

「ぬぁ、ふぐうううーっっ！！！」

物理的な意味じゃなくて、よくわからん感覚的な意味でが……。

たしかに何かボクちゃんの中に入ってきたんだ。

「い、いやあああああーっっっっっっっっっっ
！！！！！！」

少女の方も顔を青ざめながら叫んでいる。

こっちの方はボクちゃんの姿を見たからなんだろう。

自分でもわかつているが、今はそれどころじゃない。

なぜか無駄な万能感に満ち溢れてきて、違和感が半端無いんだ。

今なら一瞬念じるだけで、この少女を自分の部屋に誘拐できるかと思えるほどに。

念じてみた。

「きゃあああああああああ——————————つつつつ——！！！！」

「うほっ？」

気がついたら悪臭漂う部屋の中。

本当に、少女を誘拐できていた。

「だ、誰か助けてえええええええええええ——————————つつつつ——！！！！」

うるさいから黙らせようと念じる。

「……………」

ジタバタジタバタッ。

部屋の物を投げられまくって、うっとうしい。

動かないように念じる。

ピタッ

「……………」

「ハ、ハハハハ……………」

ありえない。

ボクちゃんは腰が抜けて、空の菓子袋の上にドサリと座り込んだ。

一体何が起こったというのか。

悪臭漂う部屋の中には、青ざめて全身が震えている男女が一組居るだけだった。

OP 3

な、何だかよくわかんないけど、凄い力だ。

何が起こったのか説明して欲しいから、とりあえず目の前で突っ立っている少女に聞いてみる。

「うーうーっ!!」

あ、あれ？

何か言いたそうな目で呻いている。

変な格好で止まったままで…だ。

「えーおーんーっ!!」

あ、口も動かせないからまともに喋れないのか。

ボクちゃんは口だけは開放してやった。

「あ、あたしの力を返してくださいっ!」

うっとうしいので従順になれと念じてみた。

もう一度説明を求む。

「あなたには相手の超常能力を奪う力があって、私の力が奪われたんです」

睨みながら教えてくれた。

嫌な感じで面倒臭くなったので、”ボクちんを心の底から慕う従順な雌奴隷”になれと念じた。

「ご主人様が何でもできるようになって、雌奴隷の私も鼻が高いです！」

「な、なんでもか？」

「はい！ 何でもです！」

話を聞いてみると少女はこの世界の神のような存在で、何でもできる力を持っていたらしい。

その力で色んな所を弄くって、似た世界との比較を楽しんでいたそうだった。

簡単に言つと、街を作るゲームのでかい版みたいなことをしていたらしい。

だが、少女はそんな奴が何人も居るという。

「マジか!？」

「はい。あたしがトップだったので、さすがに今のご主人様ほどの力ではありませんが…」

「放っておくと危険と言うことが…」

「はい。ですから…」

「よし、すぐにソイツらの力を消すぞ」

「さすがご主人様です!」

ついでだから、ボクちゃん以外の超常的なものは全て消しておいた。

すると目の前の少女も消えた。

「……………（ポカーン）」

ボクちゃんは呆然とするしかなかった。

OP 4

とりあえず、さっきの少女を復活させて話を聞いてみることに。

「あつ、あんっ……んんう……ひゃっ」

全く無いと言える少女のあれを弄りながら聞くと、喘ぎながら教えてくれた。

「あつ、たしわああああつ……もとお……かみ、ですうんっ……
のでえ……」

「ふんふん」

「ひゃああああん」

話が進まない。

でも面白いから弄りながら聞き続けた。

時間はかかったけれど、色んなことがわかったんだ。

例えば…。

この世界は魔法先生ネギま！なるコミックとソックリになるように調整されていたこと。

何故過去形なのかというと、ボクちゃんが超常的なものを全部消してしまっただけらしい。

とりあえず完全な防御とボクちゃんに都合の良い強制認識を施した後、問題がない程度に復活させておいた。

全部復活させないのは、ボクちゃんのような強力なレアスキル持ちが他に居たら困るからだ。

だから完全なる世界とか実在の英雄とか麻帆良の学園長とかは全部消したままにしてやった。

え？

その前にボクちゃんが施した完全な防御と都合の良い強制認識は何かって？

防御の方は、殺傷・神秘・精神攻撃の全てを無効にただけだ。

あの二次創作は気に入らんかったが、能力的には面白かったから参考にしたんだ。

確か『早すぎる転生物語』とか言ってたっけ。

次に、強制認識の方は、ボクちゃんやボクちゃんのした事全てが、ボクちゃんにとって都合の良い形で受け止められるというものだ。

これは今、ボクちゃんの手の中で悶えている少女のやり方を模倣した。

「も、もうダメッ、あっ、ああああ…んえ？」

「……………」

「ふっ、ひうんっ…………っ…………っ…………」

とりあえずボクちゃんの許可が無いと不完全燃焼になるように念じておいた。

わかったことは他にもある。

OP 5

「あう…んう…ひゃあっ！ クッ…くうん…」

とりあえず手を違う所にも移動させながら、話を聞き続ける。

魔法世界について。

人造異界であり、崩壊が予想されている。

で、ちょうど墓守人の宮殿に黄昏の姫巫女が繋がれていて…あれ？

何か船が集結してるけど、何があっただろう。

念じてみると事情を知ることができた。

最終決戦の直前になって、英雄と完全なる世界の両方が消えてしまったらしい。

ライフメイカーも儀式も魔法無効化も消えたらしい。

「ああっ、くうん……んあああ、あうう……」

英雄は自らを犠牲にして敵を打ち破り、世界に平和が訪れたのでした。

めでたしめでたし。

ってな感じかな。

原作ブレイクも甚だしいが、これで良かったのだろう。

「も、もうおねがいい……いかにせんあぁあぁあつ………くうん……」

「仕方ないなあ……」

「ほ、ほんと、でしゅ、かあ……？」

「うんうん」

「あ、ありあと……」ぐらいまふ……」

「一時間後にね」

「しよ、しよんなああああ——つつ！——！」

その10分後。

本気で泣き出したのを見て望みを叶えてあげたボクちゃんは、とても優しいと思います。

この神を名乗る少女も、嬉し涙を流しながらお礼を繰り返していたからね。

その後本当に嬉しそだったから、それが末永く続くように念じてあげたんです。

そうしたら、あまりの幸せに殺してと頼まれたので、そのまま成仏させてあげました。

雌奴隷の言う事を聞いてあげるなんて、本当にボクちゃんは優しいよね。

それはもう神様くらいに。

というわけで、ボクちゃんは新たな獲物を見つけに旅立つのでした、まる。

巨乳化推進計画

新たな獲物…。

どうせコミックに似せている世界なら、そのコミックのヒロイン達を獲物にしたい。

「でも3-Aの女の子たちって、まだ誰も生まれてないんだよねあ…」

そう。

今は原作開始の20年前。

あの可愛い娘ちゃん達が生まれるのは6年後のことだった。

ボクちゃんはパリポリと音を立てながら誰を獲物にするか考える。

「やっぱり初めては優しい巨乳ちゃんに限るよねあ…」

そして、その娘だけは変わらずに末永くラブラブイチャイチャしていたい。

そんな願望を持っていた。

「千鶴ちゃんは無理だから、源しずなって娘で我慢してやるか…」

ヒロインではないが、あの娘もボクちに相応しい優しい巨乳ちゃんだったはずである。

さっそくボクちは、しずなちゃんの居場所に向かった。

念じるだけだから楽ちんだ。

.....。

しかし、まだ中学1年生である彼女の胸は、原作のように大きくなっていなかった。

大きくなっていないというか…。

「ぺったんこじゃん」

ボクちゃんは落胆する。

調べてみると、1年後あたりから急に膨らみ始めるように”設定”されていた。

おそらくボクちゃんが成仏させた少女の仕業なんだろう。

「ぶっはあ……」

盛大に溜め息をつく。

他に原作の登場人物で優しい娘は今居ないし…。

魔法世界の幻を初めてにするのは論外だし…。

しずなちゃんの胸が大きくなるのを待つてなんかいられない。

かといって、念じていきなり大きくするのも嫌だ。

しずなちゃんにとって、自分の胸が”ボクちゃんに与えられた偽物”になっちまう。

道具を使っているつもりで居られたら興ざめだ。

心を弄れば解決できるが、その分だけ興が冷めていくからなるべく

使いたくないし…。

はあ…仕方ない。

「ボクちゃんが少しでも手助けしてやるか」

こうしてボクちゃんのしずなちゃん巨乳化推進計画が始まったのだった。

出会いの演出

まずは出会わなければ何も始まらない。

ボクちゃんはしずなちゃんの事を知っているが、しずなちゃんはボクちんの事を知らないのだ。

第一印象は大切だから、ちゃんと準備しないとな。

というわけで、まずは少し動くだけでも疲れるこの体を改造することにした。

いや、改造と言っても単純に痩せただけである。

「こ、これがボクちゃんか!？」

それだけで見た目が劇的に変わっていた。

スラリとした肉体。

引き締まった顔。

ダボダボの服。

「……………」

ふ、服は今の体形に合わせて、もう一度鏡を見る。

そこにはボクちんの知らないイケメンが居た。

いやボクちんの面影は残っているから、本当に痩せただけなのか…。

そう思って、ボクちんはこの体形を維持するように念じた。

「つ、次は出会いなんだな」

今、しずなちゃんは今、友達2人と海水浴に来ている。

全員美少女で、その中の1人は結構乳が大きい。

とりあえずキープ。

見ていると、3人が揃って海の奥の方に移動していた。

それを見た瞬間、ボクちんはひらめく。

偶然を装って近づいて、まずは巨乳の娘が足を吊るように念じたんだ。

「……ッ」

「恵奈ちゃんっ!」

もう一人の娘がとつさに助けるも、しずなちゃんは動けない。

とつさの出来事には弱かったのか？

それならと予定を変更して、助けに入った娘がクラゲに刺されるように念じる。

今回刺したのは毒をもっていないクラゲだが…。

「んぶおあ」

娘は驚いた拍子に海水を飲んでしまい、一緒に溺れてしまっていた。

「…ッ 恵奈さん！ 瑞希さん！」

しずなちゃんが叫んで動き出すも、時既に遅く…。

ボクちんが先に潜っていて、2人を救出していた。

潜ろうとしていたしずなちゃんの前に姿を見せ、人気の無い近くの砂浜へ。

心臓マッサージ（笑）と人口呼吸（笑）をしたら目を覚ましたわけだ。

え？

（笑）は何かって？

それは言わないお約束つてものでしょう。

ちなみに”ボクちゃんに都合の良い強制認識”は健在で、しずなちゃんには尊敬の眼差しでボクちゃんを見つめている。

そして顔を染めながら、ボクちゃんの顔……いや、唇をじっと見つめていた。

ぐへへ、狙い通り。

その後、ボクちゃんは2人が目覚めたのを確認して、その場を去った。

そして麻帆良で再会。

喫茶店でお喋りしたんだけど、3人とも顔が赤くて緊張していた。

何かお見合いみたいな空気で、連絡先も交換したね。

だから別れてすぐに3人からメールが来たのは言うまでもない。

ボクちゃんはニヤリと笑みを浮かべる。

出会いの演出、大成功なんだな。

日常の仕掛け

今日はしずなちゃんと2人で麻帆良中央公園に。

赤く染まる並木道を歩きながら、お喋りに興じていた。

「誰か付き合っている方はいるのかしら？」

「今は居ないよ。ただハーレム作るつもりだから、それに納得してくれる人じゃないとね」

雌奴隷は成仏（笑）しちゃったし。

まあ、復活させようと思えばいつでもできるんだけど。

「……………」

しずなちゃんは押し黙って、苦しそうな顔で何かを考えている。

まあ、現代を生きる日本人に、そうそう受け入れられるものじゃないからな。

その点はじっくり考えてもらうとして、待ってる間のボクちゃんはウーマンウォッチングだ。

あ、あのランニング美女のオッパイすごく揺れてる。

とりあえずキープだ。

こんな感じで、麻帆良だけで既に300人はキープしている。

キープしている女の子は、ボクちゃん以外の誰も好きにならなくなるが、代わりに襲われることもなくなるんだ。

で、ボクちゃんはいつでも彼女らの様子を見ることができる。

トイレ中でもお風呂中でも就寝中でも、見られたくない何かをやっている時でも、いつでもだ。

もちろんしずなちゃんもキープ対象の1人だった。

「……」

「ん？」

気がつくと、しずなちゃんはボクちゃんが見ていた美女と自分の胸を交互に見ていた。

「……胸の大きな女性が好きなのかしら？」

「もちろん」

即答した瞬間、目に涙が溜まった。

ボクちゃんは励ますために、こう言ってあげる。

「しずなちゃんのもこれから絶対に大きくなるよ」

「ど、どうしてそんなこと言えるのかしら？」

「だってしずなちゃん努力家だし」

「!？」

じっと見つめてやると、暗かった顔が真っ赤に染まる。

これでしずなちゃんはバストアップのために頑張り始めるだろう。

既にしずなちゃんの胸は、努力に応じて大きくなるように念じられている。

ボクちゃんの予言は絶対に当たるんだ。

.....。

別れ際、しずなちゃんは寂しそうな顔をする。

でもボクちゃんは気にせずさつさと去った。

そして直後にしずなちゃんの心を読んでも……。

（このままだと彼のハーレムの一人になっても構ってもらえなくなりそう。ううん、ハーレムの一人にだって入れてくれないかもしれないわ。なんとしてもバストアップしなくては……）

ハーレム要員になれないことを心配し、巨乳化の決意を固めていた。

もはやハーレムそのものを嫌がる発想は無い。

ぐふふっ、狙い通り。

ボクちゃん笑いが止まらなかった。

しずなちゃん頑張る

ボクちんとしずなちゃんは、麻帆良中央公園の時以外にも様々なことをしている。

そしてボクちゃんは、そのたびに様々なことを念じていた。

内容は大したものじゃないけどね。

ボクちゃんの唇が気になるとか、ボクちゃんとイチヤイチヤする夢を見るとか、ボクちゃんに会うと体の一部が少し疼くとか。

主にしずなちゃんの反応を楽しむためだったんだけど、これがボクちゃんへの恋心を磐石なものにしていたのである。

もちろん麻帆良中央公園の後にも様々なことをしているが、今日の本題は休日の話じゃない。

中学1年生のしずなちゃんがバストアップに頑張る日常の話である。

しずなちゃんは朝起きると、長い髪を軽く整えるなり、なぜかお祈りをするみたいに手を合わせる。

何をしているのか、もしや何かの宗教にはまっちゃったのかと思っただ。

だがそれは杞憂だったみたいで、しずなちゃんは10秒力を入れて

少し休憩してを繰り返していた。

肘を張ったまま合わせた手のひらに、両側からである。

最近テレビでやっていたバストアップ体操だった。

その後、四つんばいになって膝を付けたままお尻を後ろに引く。

両手を伸ばして腰を高く突き出していた。

その後、昨日のうちに作っておいたらしい食べ物を冷蔵庫から出して朝食。

メニューはいかにも健康に良さそうだけど、それだけだ。

それよりもしずなちゃんの手元にある飲み物の方が目立っていた。

豆乳である。

「しずなさん今日も豆乳？」

「その通りよ」

「あー、大好きな人が巨乳好きって言ってたっけ？」

「ええ。友達の命を救ってくれた、とても勇敢で格好良い人なのよ」

「あー、はいはい。海でのことでしょ？ 3人合わせてもう10回以上聞いているわよ……」

そして朝食後学校に行き、放課後すぐに帰宅。

そして……。

「ぬほっ」

上着もブラも全部取って、胸をもんでいた。

よもやアレかと思いきや、しずなちゃんの目は真剣そのものだ。

ん？

手の動きに一定の法則がある？

「いち、にい、さんっ」

10回くらい繰り返したら動きが変わったけれど、それも一定の手順を繰り返しているだけだった。

これもバスタップ体操なのか…。

中にはツボを押しているみたいなものもあったけど、それもバスタップが目的だと思う。

その後、部活から帰ってきた友人との夕食でも豆乳。

ボクちゃんはしずなちゃんの涙ぐましい努力に感動した。

あれほどの努力なら、近いうちに結果が出るだろう。

ぐふふっ、予想以上だ。

ボクちゃんの童貞卒業も、そう遠くないかもしれない。

その後、しずなちゃんが寝るまでの一部始終を見て、期待に体の一部をふるわせるのだった。

告白、そして…。

ある日の放課後。

ボクちゃんはしずなちゃんと人気の少ない公園で待ち合わせしていた。悠々と歩いて公園に入るボクちゃんを、しずなちゃんが待っている。

そして2人の距離が近づいた所で、しずなちゃんは思い切って言葉を発した。

「わ、私、あなた好みの女になれるように、頑張ってきて、その…」

「うんうん」

「バ、バストを1カップ大きくできたんです」

ボクちゃんは驚いた。

あれからまだ1ヶ月も経っていないのに、もう1カップ。

長さにして2・5cmだ。

本当にしずなちゃんが頑張ってきたことがわかる結果だった。

「そ、それで、もっと胸を大きくするには、好きな人に揉んでもら

うのが良いようですから……」

「……………」

そこでしずなちゃんは一呼吸起き、大きく息を吸い込んで告白の言葉を発した。

「き、気が向いた時でいいの。胸をも、揉んでもらって良いかしら？」

「喜んで！」

「ひあっ！ あんっ、あっ……くふっ……うんんう……」

即答の瞬間、既にお願いを叶えてあげていた。

一瞬で後ろに回り、両脇の下から手を入れて弄くりまわす。

人生初の告白が”好きな人だから胸を揉んでほしい”だなんて嬉しすぎる！

そんなボクちんの気持ち溢れ出た結果だった。

.....。

それでも今回は触るだけに留めた。

それに、ボクちんのハーレムに入りたいというしずなちゃん也希望も、今はまだと却下した。

初めては優しい巨乳ちゃん。

そう決めてたからね。

まだまだAカップのしずなちゃんには頑張ってもらわないと。

そう思い、心を鬼にするボクちゃんだった、まる。

努力実る。そして…

「しずなちゃん」

モミッ

「アンツ、おはようっ、いざいまうんっ」

あの告白の日から、ボクちゃんがしずなちゃんの胸を揉むのは挨拶代わりになっていた。

おはようを忘れても胸を揉むのは忘れない。

それがボクちんクオリティ。

感度は少しずつしか上がっていないが、半年も続けているんだ。

もうボクちんが念じる必要が無いほど敏感になっていた。

そして…。

モミッ、モミッ。

ふよん、ふよんっ。

「あつ、あつ、ふぁ、アンツ」

そう。

胸が大きくなっているんだ。

しかも、95・6cmのGカップ。

もはやAAサイズでべったんこの面影は欠片も無かった。

ハーレム入りを許してあげた時は、あまりの嬉しさに泣き出しちゃったんだっけ。

その後も乳の成長は止まらない。

つまり、しずなちゃんは毎日の努力を続けているということだ。

だから、ボクちゃんは違う所も弄ってあげる。

「うひゃんっ、そ、そこはぁ……っ」

「うん、だからボクちゃんの部屋に行こうか」

「！？　そ、それって……」

「そう。頑張ったご褒美」

すると、しずなちゃんはいあまりの嬉しさにまた泣き出しちゃったんだ。

まだまだ中学1年生で、あの努力を毎日続けた結果だからね。

原作とは違うイメージっぽいけど、これはこれでアリだと思う。

男冥利にも尽きるしね。

一生に一度の卒業として、これ以上のものはないと思う。

.....。

そして十分後。

ボクちんのベッドには男女が一組。

もちろん部屋は綺麗に清掃済みだ。

まあ、念じて一発だったんだけどね。

おかげで何の問題もなく卒業を迎えられるわけだ。

「クッ…もう良いよ。次は…ね？」

「んちゆるっ、ぷはっ、はぁ、はい…」

……………。

そこで何があったのかは想像にお任せするけどね。

無事に卒業できたし、しずなちゃんは凄く健気だったし、とにかく達成感が半端無い。

そして隣に温もりを……特にわき腹辺りに柔らかい弾力を感じながら、ボクちゃんは意識を手放したんだ。

巨乳化推進計画＋、完了！

あれから半年。

しずなちゃん努力とボクちんの”挨拶”の結果は、留まることを知らなかった。

具体的に言うと、しずなちゃんの胸は1ヶ月に1カップ（2・5cm）以上のペースで膨らみ続けたんだ。

おかげでしずなちゃんは、113・2cmのNカップという原作を遥かに越える魔乳を手に入れてしまったのである。

だから……。

「え、手術？　なんで？」

「んっ、巨乳症といふあつ、病気みたいいんっ、なのよお」

「げっ」

しまった。

まさか病気認定されるとは思わなかった。

ボクちん大失敗である。

と、そんな展開になってしまった。

.....。

だけど、それで手をこまねくようなボクちんではない。

当然ちゃんとフォローしてNカップを維持させる。

その第一歩として…。

「大丈夫。それ以上大きくならなければ、問題ないよ」

コリッと念じた。

「~~~~~つつつ！！！！！」

「もう大きくしないよね？」

「（コクッコクッ）」

「ちなみに揉むと大きくなるのは迷信だから、これからも挨拶は続けようね？」

コリッ

「~~~~っつっつ（コクコクツコクコクツ）！！！！」

しずなちゃんは全身をピクピクさせながら、首だけで肯いていた。

しずなちゃんの胸は”これ以上大きくならない”し、それならば”問題にはならない”のだから大丈夫だろう。

まあ、両方ともボクちんが念じたからなんだけどね。

「はあ…はあ…んあ…はふう…」

ちなみに、これ程の大きさになると乳が垂れて重くなるのが普通である。

その結果、肩が凝ったり背中が曲がったりするのが通例なのだが…。

ボクちんとの本契約による永続的な魔力供給が、それらを食い止めていた。

ボクちん魔力の影響で、重さはそのままだが垂れていない。

それどころか、先端が自然に上を向くほどの張りがある。

……その代わり副作用の快感も永続だけど（笑）

しかもボクちんの魔力は無限かつ特別製だからね。

実は今も供給しているから、ボクちんのコリツとする魔力操作だけで…。

「~~~~~つつつ（ガクガクガクガクッ）！！！！！」

”まだ一度も触れていない”のに、こうなっちゃうわけだ。

え？

もしかしてボクちんが直接揉んでいても思ってた？

ないない。

だってボクちん、今魔法世界に居るんだよ？

しずなちゃんも現実世界の麻帆良のまま。

触れるわけ……あるけど、そうするくらいなら召喚しているからね。

今は魔法世界と麻帆良の超遠距離で、映像込みの念話と魔力供給＆操作が上手くできるか実験しているわけだ。

結果は言わなくてもわかるよね。

だってこのコリツが出来るくらいなのだから。

「~~~~~つつつ（ガクガクガクッ）！！！！」

しずなちゃんの巨乳化推進計画が始まって一年。

計画は順調に進み、確実に巨乳以上。

そして、ボクちんとラブラブ。

でもしずなちゃんの全ては、ボクちんが一方的に掌握しているんだ。

本人はもちろんのこと、友達や家族もね。

しずなちゃんの母や姉と食べる”ドンブリ”は、とても美味しゅうございました。

もちろん、友達3人で一緒に”遊ぶ”のも楽しかったです。

なーんて、敬語で言ってみちゃったりして。

避妊はしていないから、誰か妊娠しているかもね。

でも誰が妊娠してても娘しか生まれないし、ボクちんが育てる必要もない。

さらに将来美女になるのが約束されていて、全部ボクちんのもの。

常識までも捻じ曲げる、それがボクちんクオリティ。

楽しみだなあ、ぐへへ。

こうして、しずなちゃん巨乳化推進計画＋ は、大成功のうちに幕を閉じましたとき、まる。

巨乳化推進計画、その裏で…。

時は1年前にさかのぼる。

ボクちんがしずなちゃんに出会った頃、英雄と完全なる世界が消えた魔法世界では、各国間で和平条約が結ばれていた。

過去の事は水に流して仲良くしましょう、と。

しかし2カ月後。

メガロメセンブリアはその舌の根が乾かないうちにオスティアを連合から除名。

そして侵攻。

完全なる世界のリーダーである父殺しアリカの討伐という名目で、黄昏の姫巫女を失ったオスティアを奪おうとしていた。

この所業に猛反発したのがヘラス帝国である。

オスティアの元首アリカは前回の戦争の経験を通じて、帝国の第3王女テルドラと親密な関係になっていた。

のみならず、国としても仲良くなってきた矢先の出来事だったのだ。ヘラス帝国はオスティアの擁護とメガロメセンブリアへの非難声明を発表。

こうしてたった2ヶ月の平和は終わりを告げ、魔法世界は再び戦争時代に突入した。

.....。

グフフツ、上手くいった上手くいった。

現在、ボクちゃんは魔法世界に分身を大量に送り込み、裏工作に励んでいる。

2ヶ月の間に各国の首脳陣を裏で掌握し、再び戦争を始められた。

両国は勝ったり負けたりを繰り返して、国力をいたずらに疲弊していく。

が、その間にも両国は次々と資金源を手に入れているため、お金だけは尽きない。

その結果、兵士と傭兵だけが次々に居なくなっていく、両国は徴兵を決断した。

対象は成人男性。

しかしそれでも直に足らなくなり、学徒動員で男子学生も徴兵される。

そして5歳以上の男子が全て居なくなり、女性兵士の投入が決まる頃を見計らって……。

ボクちんが裏で手を結ばせていた世界中の女性たちが、一斉に動き出す。

『男が権力を握るとロクな事にならないのは、歴史と今が証明している。今こそ男どもを権力の座から排除し、私たち女性による平和を実現しよう』

その旗印の下、全ての国の女性たちが一斉に立ち上がったのである。そう。

”全ての国”の女性たちなのだ。

実は戦争に参加していなかったアリアドネーでも首脳陣の腐敗が問題となっていた。

そのため戦乙女騎士団を始めとするアリアドネー国内の女性までもが立ち上がり、文字通り『世界女性蜂起』が実現したのである。

もちろん世の権力者と男性たちは反発し、それらはボクちんの加護を得た女性たちに排除されていく。

ただ、あまりにも戦力比が偏り過ぎていたので、姿を変えたボクちんの分身も権力者側勢力として参戦。

おかげで女性たちの蜂起に賛同した数少ない男性も、ボクちんの加護が与えられていないブス女と共に、戦いの最前線で散っていった。

もちろん5歳以下の男の子も、”偶然”死んでいった。

そして頃合を見計らってボクちんの分身を消して、女性側が大勝利。

魔法世界は蜂起した女性たちの手で統一され、彼女らを裏で束ねたボクちんは英雄に祭り上げられたのである。

.....。

グフフッ、もうボクちんが何をしていたのかわかっているよね。

そう。

ボクちゃんは魔法世界16億人の中から、男とブス女を”間引き”していたのだ。

その結果、もう魔法世界にはボクちゃんと1億人の美女・美少女・美少女しかない。

現実世界との道を繋ぐゲートも”なぜか”機能しないから、男やブス女が流入してくることもない。

それでも問題にならないのは、ボクちゃんが大量に分身できるからだ。

正確には”ボクちゃんに都合の良い強制認識”の効果で問題にならないんだけどねw

一連の作業が完了したのは、奇しくもしずなちゃん巨乳化推進計画が終わったのと同じ頃だった。

こうして巨乳化推進計画の裏で、魔法世界間引き作戦が成功のうちに幕を閉じていたのである。

そして……。

ボクちゃんの本体が魔法世界に到着し、1億人との蜜月が始まる。

ボクちん皇帝の戴冠式、その1

外からは見ることでできないマジックミラーの窓。

その先にある大きな広場には、1千万人も的美女・美少女・美幼女がひしめいていた。

彼女たちは一様にソワソワしていて、今か今かと時を待っている。

上空には全国放送のためのカメラを積んだ、小型飛行船が浮遊していた。

「ご主人様、そろそろお時間です」

「うむ、ご苦勞」

「あんっ」

お礼に軽く撫でてあげてから、タキシードのネクタイを締める。

そしてメイド姿の彼女に先導され、1千万人の美女・美少女・美幼女の下に歩いていった。

そして…。

「これより、新皇帝陛下の戴冠式を執り行います。我らが英雄、ご

主人様のお、おなあーいーいー！！」

垂れ幕が一斉に外され、上座側から会場への階段を下りる。

すると大歓声が響いてきた。

「きやあああ——つつ！……ご主人さまあああ
あ————つつ！……」

「こっち向いてええーっ！っ！っ！」

「かつこいいいいーっつっ!」

ボクちゃんは手を振ってあげる。

するとその方向にいる女の子たちが喜び合うのを見て取れた。

そうこうしているうちに中央の大舞台に到着。

そこには、あの世界女性蜂起における各地のリーダーが、ドレス姿で待っていた。

そして戴冠式が始まる。

ボクちん皇帝の戴冠式、その2

戴冠式は厳かな雰囲気のまま、つつがなく進行していた。

とはいえ、ここはボクちんの魔法世界。

厳かな雰囲気ながらも、ボクちんの胸と何かをふるわせる時が何度もあつた。

例えば国民全員が復唱する宣誓の言葉。

<< 我々、魔法世界に住む全ての国民は >>

「「「「 我々、魔法世界に住む全ての国民は 「「「「

<< ご主人様の妻として、駒として、雌奴隷として >>

「「「「 ご主人様の妻として、駒として、雌奴隷として 「「「「

<< 相応しくあるために常に自分を磨き >>

「「「「 相応しくあるために常に自分を磨き 「「「「

<< 生涯の全てをかけて尽くし続けることを誓います！ >>

「「「「「 生涯の全てをかけて尽くし続けることを誓います！」

これを皆がみんな、心を込めて本気で言ってくれているのだから、
たまらない。

生中継のタイムラグのため、少し遅れて街の方からも同じ宣誓が聞
こえてきている。

そして遥か遠い地を念じて覗くと、そこにいる3歳の女の子さえも
が同じように復唱していた。

こんな感じでボクちゃんには堪らない話も多く、理性を抑えるのが大
変だった。

なにせ各地のリーダーによるお話では、皆がみんな、ボクちゃんの分
身との馴れ初めを嬉しそうに語るんだ。

もちろん馴れ初めにはボクちゃんクオリティのセクハラが多分に含ま
れている。

だけど聞いている皆が揃いも揃って真剣な顔で、かつ羨ましそうに
しているんだ。

これも彼女達に与えた”加護”のおかげだが、本当に理性を抑える

のが大変だった。

そんなこんなで戴冠式のプログラムはつつがなく進んでいき、もう儀式の終わりの間近。

戴冠も存在しない前皇帝の代役がボクちんの頭に冠を載せて終了。

だが本当に大変なのはここからだったんだ。

ボクちゃん皇帝の戴冠式、その3

皇帝陛下のお言葉。

それは全ての国民が見ている中で、彼女らに伝えるメッセージである。

だからボクちゃんも、ちゃんと考えて作ってきたんだ。

「ボクちゃんの妻であり、駒であり、雌奴隷でもある君たちよ。普通の男なら1人で1億人も相手するなんて無理だと思う。だけど、ボクちゃんは違うよ。分身を使うけど、全員が女の子を妊娠できるように頑張つてあげる。」

そう宣言した瞬間、世界中が歓声に沸いた。

まあ、さすがにあの3歳の女の子は頭にクエスチョンマークを浮かべてたけどね。

近くでちよつとオマセな5歳の女の子が感動していた。

「まずは100万人作るつもりだから、分身1つが君たち100人を相手にすることになる。奪い合わないで、みんな仲良く楽しもうね!」

そう言った瞬間にどよめいて、さっそく友人と一緒にグループになるうと話す声がよく聞こえた。

「あとボクちゃんは直接政治に関わるつもりはないよ。男が権力を握るとロクな事にならないのは、歴史と今が証明しているからね。みんなで協力して、ボクちゃんに相応しい国を作って欲しい」

そう締めくくると、世界中から大きな拍手が聞こえてきた。

”都合の良い強制認識” サマサマだ。

そして戴冠式はボクちゃんも知らない最後のプログラムに移る。

ボクちゃん皇帝の戴冠式、その4

舞台上の上、ボクちゃんの前に各地のリーダー達が横一列に並ぶ。

そしてボクちゃんの斜め後ろにはわざわざカメラが回りこんであり、リーダー達を順番に映していた。

ドレス姿のリーダー達は、皆一様に顔を赤く染めており、中には全身を震わせている子までいた。

司会の娘も列に加わっている。

一体何をするのだろうか。

「さて、私たちはご主人様の妻として、駒として、雌奴隷として尽くし続けることを誓いましたが、誓うだけではいけません」

え…もしかして…。

「そこで各地のリーダーである司会である私たちが、ぜひとも国民の代表として最初に実践したい。そういうことで最後のプログラムが決まりました」

と…いうことは…。

「ご主人様には全国生放送の中で、私たちにお好きな命令をして頂きたいと思います。その命令が耐え難いものであればあるほど、私たちにとっては自分の覚悟を示すチャンスになります。」

これはまさかの…。

「ですから、なるべく私たちにとって耐え難いことをお命じ下さい」

公認羞恥プレイ来たああああーっ！！！！

通りでみんな揃って真っ赤になっているはずである。

しかも…。

「ご主人様っ！ 私たちも！ 私たちにもお命じ下さああー！！！！」

「私も覚悟を見せたいです！」

そんな観衆の声により、急遽誰にでも命令できることになった。

ぐふっ、ぐふふっ、この娘たち最高過ぎる。

でも観衆の皆はまた今度と断って、今は舞台上の美女たちに集中し

た。

全員に同じ格好をさせて並べたり、1人ずつカメラで舐めるように撮影させたりと、色んな事を命じた。

とりわけ多く命令したのが、全身を震わせていた少女。

ついつい虐めたくなって、やりすぎて、仕舞いには泣き出しちゃったんだけど……。

それまでの努力を褒め称えてキスしてあげたら、すごく幸せそうな顔になったんだ。

それで、もちろんこの場で全員と本契約。

もちろんやり方はしずなちゃんと同じで”一番簡単な方法”だ。

具体的には言わないけど、全国生放送でも構わずやるのがボクちゃんクオリティ。

おかげで最初の厳かな雰囲気は欠片もなく、今や世界中がある意味ヤバイ雰囲気に含まれていた。

しかも皆がみんな、不完全燃焼。

友達と助け合えば多少の効果はあるものの、それでも不完全燃焼なのは変わらない。

解決できるのはボクちゃんだけなのだ。

そんなこんなで、最後は取り繕ったように司会が終わりを告げた。

「こ、これにて、皇帝陛下の戴冠式を終了いたします」

外はもう、真っ暗だった。

敗戦者の末路

ボクちゃんは魔法世界間引き作戦で男とブス女を始末したわけだが、全ての女性が世界女性蜂起に参加したわけではない。

中には最後まで権力者側に居たり、途中で権力者側に寝返った女性もいたのである。

その中でも有名なのが、オスティア女王のアリカと帝国第三王女のテオドラだ。

また、セラスという女がアリアドネーで戦乙女騎士団を裏切って情報を流していたことも見逃せない。

このように、魔法世界の原作キャラたちは、揃いも揃って権力者側に付いていたのである。

さて、原作キャラのように権力者側にいた美女・美少女たちは、ある部屋に並べられて全身を機械に拘束されていた。

両手両足どころか両目も無く、力も奪われた状態だ。

穴という穴全てにチューブが繋がれており、その中を色々なものが移動していた。

チューブには様々な大きさのものがあり、中には蠢いたり振動したりしているチューブもある。

そして……。

「シューシューッッッ！！！！ フーーーーーッッッ！！！！」

その中の1人、1ヶ所だけチューブを外されていた穴。

そこから出てきた赤ん坊を、機械が受け止めた。

機械はへその緒を処理し、赤ん坊だけを隣の部屋に移動させる。

終わったときには、再び全ての穴にチューブが繋がれていた。

「ウーッッ！！！！ アーーーーウーーーーッッッ！！！！」

チューブに口を塞がれた声は、誰にも届かない。

機械はただ、決められた動作を繰り返すだけだ。

……。

そう。

敗戦者の末路は、ボクちんの子供を量産する家畜だったのである。

しかしどんなに泣いても喚いても、助けが来る事はない。

原作キャラにしても、王族2人の騎士はもう居ないし、セラスには元々強い味方が居なかったからね。

もう産めない身体になるまで、延々と同じ作業が繰り返されるのだ。

そしてまた1人。

1ヶ所だけ、チューブが外された。

そこで、処女でありながら妊娠率が高い日の希望者のうち、気に入った子たちを前日に選択。

この子も、ボクちゃんの周りや外で控えている子たちも、そうして選ばれた1人である。

そんな事を考えながらもする事はしていき、魔方陣を発動させて本^{バク}契約^{ティオー}。

相手を替えて本契約^{バクティオー}。

さらに相手を替えて本契約^{バクティオー}。

それを繰り返す。

例外もあるが、それもただ本契約^{バクティオー}をしていないというだけである。

例えば……………。

朝・昼・夕の食事は、口移しで食べさせてくれている。

机の下にも1人。

…何をしているかは言わないけど。

トイレでは紙を使わないで綺麗にしてくれている。

…どうやって綺麗にしているかは言わないけど。

風呂はタオルを使わないで洗ってくれる。

… 何で洗っているかは言わないけど。

と、こんな感じである。

そして夜になったら、また次の日に呼ぶ希望者を選ぶのだ。

彼女らの95%は幻なのに、今はそれも気にならない。

……まあ、優先的に”人間”を選んではいらぬけどね。

それで次の日も、相手を替えて同じことを繰り返す。

と、忘れてた。

お休みの挨拶もしないといけないよね。

ボクちゃんは群がる女の子の感触をそのままに、一瞬で部屋を綺麗にする。

そして従者にコリツと魔力を送った。

〃 〃 〃 〃 〃
)))))
 つ つ つ
 ! ! ! !
 ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ

これが皇帝陛下ことボクちんの日常である。

19年間の出来事

その後、ボクちゃんは魔法世界で酒池肉林生活を楽しみながら、色々なことをしていた。

中でも特に重要なものが2つ。

1つ目は、しずなちゃんとのラブラブイチャイチャである。

でも、思っていたほどエロエロではない。

しずなちゃんは、バストアップに励んだ1年の達成感が凄まじかったらしく、原作では考えられないほど精力的に活動していた。

学業・魔法・夜伽の勉強に、ボランティアへの参加。

新しい部活やサークルの設立に、医科大学の首席卒業。

新しいことに挑戦し、頑張って結果を出し、その達成感からまた新しいことに挑戦する。

出来すぎなくらいに完璧な彼女は絶大な人気を集めたが、隣にはいつも恋人 兼 助手のボクちゃんが居る。

……まあ、分身なんだけどね。

でも皆にはわからないし、ボクちゃんとしずなちゃんはラブラブな所をみんなに見せ付けているからね。

もちろん”挨拶”も今まで通り。

おかげで前かがみになる男が続出していた。

本当にエロエロなことができるのは、夜と早朝だけである。

2つ目は、現実世界の掌握。

表と裏。

権力者側と対抗勢力。

その全ての首脳陣を、2年でボクちんの分身に置き換えた。

間引きをしていないし、分身は元の人間を忠実に再現しているから、誰も気がついていないけどね。

その後17年間、生きている男をボクちんの分身と入れ替える作業を継続していったことで、ついに男の駆逐に成功した。

ぐふふつ、これで現実世界30億人の女の子はボクちんのものだ。

それに伴って、ボクちんとの間に男の子も生まれるようにしておいた。

……その男の子もボクちんの分身なんだけどね。

世界征服が完了していることに誰も気付かないまま、今日も世界は

回り続ける。

そして…。

とうとう原作開始の日がやってくる。

主人公の名前は、ネギ・スプリングフィールド。

ボクちんが変身した、架空の少年である。

ネギの修行内容

メルディアナ魔法学校を首席で卒業したボクちゃんは、ネカネとアーニヤを連れて学校の出口に向かっていた。

「ネギ、何て書いてあった？ 私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今、浮かび上がるとこ」

魔法学校では、修行内容が卒業証書に浮かび上がる。

それを知っている2人は、ボクちゃんの両側から卒業証書を覗き込んだ。

内容はやはり、原作どおり

「日本で」

「……………」

「先生をやること」

と。

直後、悲鳴のような叫び声が……あがらない。

10歳の教師なんて絶対にありえない。

2人ともそう思っているのにも関わらずだ。

なぜなら……。

「そして千人の女性を孕ませてくること」

それよりも衝撃的な命令が、後に続いていたからである。

あまりのインパクトに2人は固まってしまっていた。

「
「
「
.....
「
「
「

「
「
「
.....
「
「
「

「
「
「
.....
「
「
「

「
「
「
.....
「
「
「

「
「
「
.....
「
「
「

「こ、校長！ ” 孕ませ” ってどーゆーことですか!？」

「ほう…… ” 孕ませ” か……」

「何かのマチガイではないのですか!？ 10歳で×××なんて無理です!」

「そうよ！ ネギったらただでさえエロでスケベで……」

「こ、こらアーニヤちゃん!」

「あ、えとえと、ネギとは私とネカネお姉ちゃんがしたんだから！
あと千人なんてダメに決まってるでしょっ!」

「ああっ」

アーニヤの失言にネカネが頭を抱える。

もっしてるのがバレたら、×××が無理なんて言えないもんね。

……校長もボクちんの分身だから実はバレているんだけど。

「しかし卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためには、頑張つてセツ……もとい、修行してく

るしかないのう」

「「 ああああ……」」

「あ、お姉ちゃん！ アーニャ！」

原作とは違って、ネカネだけでなくアーニャもフラツと倒れた。

何をどうしても修行内容は覆らないから、ちゃんと介抱だけはしてあげた。

方法は言わないけどね。

アーニャは10歳の身で陣痛に耐えながら修行をしないとイケないわけだ。

……まあ、それは他の卒業生も同じなんだけど。

それに同じ経験をした先輩が5年分もいるから、参考にすれば良いと思う。

だからアーニャの件は大したことじゃない。

むしろ教師と在校生たちの方が大したことである。

既に半ば女子校と化していたメルディアナ魔法学校の、教師と生徒。その大半が同時に子供を孕んでいて、一斉にお腹が大きくなってい

くのだから。

ネカネとアーニヤ、魔法学校。

麻帆良に行っても、ちよくちよく様子を見てみよう。

そう思うボクちゃんだった。

名簿から消えた者たち

「ぶはあゝ」

ボクちゃんは写真付きの出席簿を見て溜め息をつく。

それは確かに原作の3 - A……いや今は2 - Aの少女達のクラスだった。

でも入れ替わっていて存在しない原作キャラも多く居たのだ。

エヴァンジェリン、ザジ、龍宮、桜咲、長瀬。

この辺の人間じゃない奴らが、まず居ない。

ボクちゃんは神？の少女から能力を奪ったとき、自分にとって危険な奴らを真っ先に排除した。

だからエヴァンジェリンは仕方がないと思ったけど、問題はザジと龍宮と桜咲と長瀬。

鷹の子はやはり鷹から生まれるのか、彼女らの親が彼女らを産む前に、消去されてしまっていたのである。

その点は近衛木乃香も同じで、英雄の父親を既に消しているから普通に生まれてこなかった。

次に未来人、超鈴音。

コイツはそもそもこの世界に来ていない。

これは、先祖のナギが子供を作る前に消されたからだと思う。

だからこの世界に超包子は無いし、絡繰茶々丸も作られていなかった。

最後に最大の予想外。

それは神楽坂明日菜と古菲^{クィフェイ}が居なかったことである。

まず神楽坂明日菜こと黄昏の姫巫女は、魔法世界間引き戦争の最中に死んでいた。

力と英雄を失った関係でメガロメセンブリアの上層部が彼女を虐待しており、どう見ても美人には見えなかった。

そのためボクちんの加護を得た美女が、他の権力者側のブス女と一緒にに間引いていたのである。

そして古菲は今も中国に居て、ボクちんの分身の餌食になっている。

元々、強者が集まる噂が全くない麻帆良に留学するわけがなかったんだ。

来ないとわかった瞬間、分身に襲わせて余裕で勝利。

全てを奪ってやったんだ。

まあ、相手は自分より強い男だけと言っていたし、問題ないだろう。

他の男と純愛しようが、そいつもボクちんの分身だしね。

というわけで、結局2-Aに居ない原作キャラが、エヴァ、ザジ、龍宮、桜咲、長瀬、木乃香、超鈴音、茶々丸、神楽坂、古菲。

計10人である。

割合にして3分の1もの女の子が食べられないというのは痛かった。

まあ、どうしても食べたければ他のコミックに似せた世界から召喚しちやえばいいや。

そう思いながら2-Aの教室の扉を、罫が仕掛けられているのとは反対側から開くのだった。

初めての魔法学、その1

「今日からこの学校で魔法を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。このクラスの担任もしますので、よろしくお願いします」

これは2 - Aの皆にしたボクちんの猫かぶり挨拶だが、何も間違っていない。

なぜならこの世界のネギ先生は、原作とは違って本当に魔法を教えるからである。

ネギ先生の赴任と同時に全学年に追加されたカリキュラムは、その名も魔法学。

全員が一期生ということで、生徒達は朝礼の時のようにグラウンドに集められる。

そして、午前の授業時間を全て使って授業を行う。

また、既に魔法を使える生徒と魔法先生は、ネギ先生の補佐をする。

それが魔法学という授業だった。

その実態は、ボクちんの課題を達成させるために急いで用意された環境なんだけどね。

だからボクちんを補佐してくれる魔法先生も、全員が女性なのであ

る。

「それでは、第一回、麻帆良女子中等部魔法学の授業を始めます」

「一同、礼！」

「『『『『』』』』』 よろしくおねがいしまぁーすっ！！！！」

先ほどまで「可愛い！」とボクちんを見て目を輝かしていた女子中学生が、一斉に頭を下げる。

そして恒例の自己紹介を終えた後、ボクちんはさっそく授業を始めることにした。

皆の手には既に初心者用の可愛い杖と教科書が行き渡っている。

準備は万端だ。

「今日は最初の授業という事で、一番簡単な魔法を使ってみましょう。みなさん、教科書の1ページを開きながら杖を持ってください」

生徒たちは初めての魔法ということでソワソワしながらも、真剣な表情でボクちんを見ながら準備する。

「杖を振りながら」プラクテ・ビギナル、エクセルマティオー「武装解除」です」

「きゃっ」

実演すると葛葉刀子の真剣は、衣服ごと遠くに飛んでいった。

ホームラン

というわけで刀子先生には”あぶない水着”を着せて、説明を続行しました。

「このように武装解除は、相手の獲物を吹き飛ばして自分が攻撃されないようにする呪文です」

「そっかあ……」

「掛けたもん勝ちだね」

「なんか面白そう」

一斉に場がどよめくが、その大半がボクちに都合が良いものだ。

これはボクちんの強制認識じゃなくて、麻帆良の魔法教師たちが内緒で準備していた認識阻害の効果。

ただ、認識阻害が効いていない魔法使いや長谷川千雨ちゃんにはボクちんの強制認識が働いているみたいだ。

まあ、どっちでも良いんだけどね。

それより今はエクセルマテイオー武装解除の説明だ。

「服が使えなくなっちゃっても替えの水着が用意されています。刀子先生に渡した”あぶない水着”の他に”いけない水着”や”きわどい水着”なども用意していますから、安心して隣の人に魔法を掛けてあげてください」

「……………（コクツ）」

ボクちゃんは生徒たちが頷いたのを確認して実習を始めさせる。

始まりの合図をした、次の瞬間

「………… プラクテ・ビギナル、エクセルマテイオー武装解除——つつつ！——！！
！……………」

グラウンド中に舞い散るブラウス、スカート、ブラジャー、シヨーツ。

それに次いで杖が飛ぶが、靴と靴下だけはなぜか最後まで残っている不思議w

初心者魔法が”アール デスカット火よ灯れ” じゃない事も含めて、もちろん全てボクちんの仕業である。

エクセルマティオ
そして武装解除だけは、訓練無しで誰もが使えるようにしておいたのだった。

初めての魔法学、その2

衣服と杖が空を舞う魔法学の授業中…

「ネ、ネギせんせえー……き、きわどい水着を、くれませんかー…？」

目が前髪で隠れている女の子が顔を赤く染め、両手で3ヶ所を隠しながらボクちに話しかけてきた。

あ、この子2 - Aの宮崎のどかだ。

左右には頬を染めて1ヶ所だけを両手で隠す綾瀬夕映と、むしろ見せ付けるように堂々している早乙女ハルナがいた。

ポーズこそ違うが3人とも同じ格好である。

ボクちゃんは緊張を和らげるため、原作のように髪型に注目してあげた。

「はい、きわどい水着。あとお節介かもしれないけど、顔を髪で隠しちゃうなんて勿体ないよ？」

「でしょでしょ！？ かわいいと思うでしょ！？ この子かわいいのに顔出さないのよね！」

夕映ちゃんとハルナちゃんは協力して、両側から前髪をかきあげてのどかちゃんの顔を晒す。

カアアッ

のどかちゃんはさらに顔を赤くして、真っ赤っかになる。

「えっ……あっ……」

顔を真っ赤にしながらも動くに動けない様子を見て、両側の二人がニヤリ。

夕映ちゃんとハルナちゃんは協力して、両側から手首を引っ張ってのどかちゃんの3ヶ所を晒す。

「ひゃっ！ ネギせんせえ……見ないでござーい……」

もちろん無視してガン見である。

何気に両手が塞がっている両側の2人もだが。

「あっ……そんな……パル……ゆえゆえ……」

ぶしゅーっ。

そんな擬音が聞こえたかと思うと、のどかちゃんはそのまま気を失ってしまった。

ボクちゃんはしばらくのどかちゃんが眠り続けるように念じた。

そして…。

「すみません夕映さん、ハルナさん。もしのどかさんが授業終了まで起きなかつたら、介抱を手伝ってくれないか？」

「もちろん」

「はいです」

最初の3人が決まる。

のどかちゃんは授業が終わっても起きないし、夕映ちゃんとハルナちゃんは、ボクちゃんの手を借りずに連れて行く発想ができないように念じられているからだ。

これようやく、卒業課題の達成へ一歩……いや、三步を踏み出したのだ。

.....。

と思いきや、そうではない。

その後も同じように気絶する子が100人以上も続出したんだ。

2・Aの原作キャラでも、運動部4人組の和泉亜子と演劇部の村上夏美がボクちんの前で気を失っちゃったしね。

裕奈ちゃん、まき絵ちゃん、千鶴ちゃん、グッジョブですw

気絶した子の付き添いもあわせると300人にもなってしまったのである。

さすがに300人も女の子を保健室に入れる事はできないので、代わりに体育館へ搬送。

そこに用意された別荘にボクちんと何人かの生徒が先に入る。

他の子は魔法教師達が別荘の外で看病しつつ、時間をずらして入ってきてもらったのである。

次の日の朝までだったから、別荘の外の時間で18時間、中の時間で36日間。

それをフルに使って何をしていたのかは内緒だけだね。

驚く子や抵抗する子もいたけど、最後には皆嬉しそうな顔だったとだけ言っておこう。

魔法先生や魔法生徒のも含めて、手元に300人以上のカードがあるからね。

これで好きなときに召喚したりコリッとしたりできる。

「~~~~~」

これで、かなり課題達成に近づいたはずだ。

ぐふふ、この方法を考えた魔法教師グッジョブ！

「ひう…んあ…任せてください」

「はあ……はあ……ふふっ、ありがとう」

口に出して言うてみたら、刀子先生とシスター・シャークティーがお礼を言った。

うわ、予想外すぎる。

もはや原作とは別人だと思っボクちんだった。

ネギ先生の日常1

ボクちんの朝は早い。

それは麻帆良に来て変わらなかった。

窓から差す朝日の眩しさで目覚めたボクちゃんは、従者にコリツと魔力を送る。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

これで多くの従者が目覚めるのは、皇帝だった頃から続けている日常だ。

しかし毎日続けていると従者も慣れてくるもので、魔法世界の皆からは普通に挨拶が返ってくる。

遅れて麻帆良。

ボクちゃんは返礼としてコリツと魔力を送った。

[illegible]

目の前の従者たちは、全身液体まみれで背をのけ反らせている。

ボクちゃんは彼女らをスルーして、女子寮の大浴場に向かった。

.....。

そして大浴場。

「あ、ネギ先生来たっ」

「ネ、ネギせんせー……」

「ネギ先生、もう我慢なりませんわ！ さささっ、こちらに」

「あ、いいんちよずるーいっ！」

「ダメよ、あやか」

クイツ、むにつ。

「ちづるさん、そうはさせません。ネギ先生を返しなさい！」

グイツ、むにむにつ。

「ちょっと何やってんのよっ！ 私もまざる！」

グイツ、むにむにむにつ。

「何々、バスト勝負？ 胸の大きさなら負けないよぉー」

グイツ、むにむにむにむにつ。

今日はコミックとソックリな台詞でマシユマロ地獄だったが、今の彼女たちは水着を着ていない。

それに全員が顔に集中しているわけじゃないしね。

え？

アレに胸を押し付けている子もいるかって？

当然居るに決まっているじゃないか。

”アレ”が何かは言わないけど、想像はつくと思う。

とはいえ、朝の挨拶で出来上がっている彼女たちがそれだけで終わるはずもなく……。

ボクちゃんはここに居る全員の相手をすることになるのだった。

まあ、全員とは言っても今日の朝風呂担当の娘だけだ。

これも魔法世界の時と同じで、希望者の中からボクちゃんを選んでいくんだよねー。

グフフツ。

朝の教室では、むずむず顔の生徒たちがスツキリ顔の朝風呂担当を羨ましがっていた。

むずむず顔の生徒の中には、頻繁に身を擦じらせる子もいれば、会話しながら机の角を使っている子もいる。

トイレの個室で頑張っているのも、むずむず顔の生徒だった。

キンコンカーンコン…

チャイムが朝のショートタイム5分前を告げる。

するとトイレから生徒と女性教師が次々に出てきて、おのおの教室に飛び込む。

その顔は一樣に赤くて不満気だ。

ボクちゃん以外では不完全燃焼になるように念じてあるからね。

みんな平然を装っているけれど、部屋の中は香水と女の子の匂いが充満している。

ぐふっ、ぐふふっ、ぐふふふふっ。

微妙な雰囲気のままショートタイムが終わり、魔法学の授業。

ネギ先生ことボクちゃんの日常は、始まったばかりだ。

ネギ先生の日常2

「一同、礼！」

「………… おねがいしまぁーす……………」

「さて、基本的な魔法の授業はこれで最後になります。みなさん、教科書の132ページを開いてください」

立ったままでページを開く音がする。

微妙に色っぽい声もする。

「最後は先生が教える唯一の攻撃魔法、魔法の射手です。しかし氷や炎で傷つけるわけには行きませんから、これを使います」

ボクちゃんは杖を振り上げ…。

「魔法の射手セイの一矢」

「ひああああああー……………」

助手の佐倉愛衣ちゃんに振り下ろした。

愛衣ちゃんは床に崩れ落ちそうになるが、ボクちゃんが手を引つ掛けてそれを食い止める。

「んひひひひひーっっっ！！」

どこに引つ掛けたかは内緒だけだね。

とりあえず引つ掛けた手を動かしながら話を続ける。

これから実践するにあたって、手や手に持った道具で自分にも他人にも触れないようにすること。

そして時間が経つごとに体の一部が疼くようにすること。

セイの矢は自分に射れないので、解決するには誰かにセイの矢を使ってもらうしかないこと。

セイの矢を受けてしばらくすると、また体の一部が疼くようにすること。

その他、細々とした説明をして…

「さあ、始めて下さい」

「「「「「 プラクテ・ビギナル、魔法の射手セイの一矢 「「「「「
」

瞬間、桃色の矢と色っぽい声がグラウンド中に飛び交った。

が、しばらくすると1人の生徒が集団の中から抜け出してくる。

2-Aの長谷川千雨ちゃんだ。

「ネ、ネギ先生、お願いだ……。お願いだからセイの一矢を私にかけてくれ」

どうやら自分に魔法をかけてくれる友達が居なかったらしい。

ボクちゃんはニヤリと微笑む。

千雨ちゃんには顔を青ざめる。

「どうしよっかな」

「お願い……お願いだからネギ先生っ！ 何でもするから、どんなことでもするからっ！！」

「うーん」

[illegible]

その後、最も弱い威力でセイの一矢をかけてやって、重ね掛けするたびに要求。

千雨ちゃんに名前を書かせた強制証文に項目を追加していき、雁字がんじ揃ぐらめにしてやった。

「はあ…はあ…あ、ありがとうございますご主人様…。でももう一度、もう一度この雌奴隷にお情けをっ！」

おかげで性格が変わっちゃった。

やったのは分身で、場所は寮の千雨ちゃんの部屋だけだね。

本体のボクちゃんは愛衣ちゃんを弄りながら、千雨ちゃんのように頼ってくる子への応対をしている。

同じ2 - Aだと、葉加瀬聡美ちゃんも頼ってきたね。

超鈴音が居ないから他の子との繋がりがないのである。

もちろん分身と一緒に個室へ送っておいた。

だが同じく繋がりが無いはずの四葉五月ちゃんは、その人柄から自主的に助けてくれる人が多数。

むしろ沢山の矢を受けすぎて物凄いことになっていた。

それはもう、18禁でしか描写できないくらい大変なことに…

…描写しないけどね。

あ、手の中の愛衣ちゃんも同じくらいヤバイことになったら。

…これも描写しないけどね。

とにかくボクちゃんは、こんな感じで授業をしている。

そしてボクちゃんの日常は、まだまだ続く。

ネギ先生の日常3

昼食も魔法世界の時と同じで、口移しで食べさせて貰っている。

「はいネギ先生、んー」

「あむ」

ぐちゅ、ぐちゅ、じゅる、ぐちゃ、ぐちゃ、ごくん。

「「ぷはっ」「」

同時に、机の下にいる1人が……

「んっ、んっ、ズズッ、んっ、んちゅるっ、んっ、んっ、んっ」

…何をしているのかは、もちろん言わないけど。

ただ、これも魔法世界の時と同じとだけ言っておく。

そして、ボクちんの授業が無い午後には、明日の授業の準備をする……わけがない。

授業の準備なんて面倒なものは、他の魔法先生たちにお任せである。それならボクちゃんが何をやっているのかというと、他の先生方の代役である。

だが、ボクちゃんが真面目に代役をこなすわけが無い。

例えば今は2 - Aの国語の授業。

ボクちゃんは全員の体を疼かせて、スーツの下を脱いで教壇の上に座る。

瞬間、全員のもの欲しそうな目が、ボクчんの下半身に集中する。

そしてボクчんの目の前に、生徒の座席と同じ配置で30個の”穴”を出現させた。

「それでは教科書255ページ5行目から読んで貰いましょう。お願いするのは…」

そして穴の上に太い棒状の何かをさまよわせて……

穴の1つに先端を固定。

そして思いっきり押し込む！

「んあああああああ——————————つつつつ——！！！！！！！！

棒状の何か黒い穴を通った先には何もなくて、代わりに宮崎のどかの悲鳴が響き渡る。

ぐふふっ、何があつたかは想像にお任せするよ。

魔法世界でもそうだったけど、のどかちゃんみたいなウブな女の子ほど虐めたくなるよね。

ボクちゃんは黒い穴から少しだけ出ている棒をグリッと動かして、ちゃんと立って読むように促した。

「は、はひ……もうひわへ……ないれふ……」

もちろん直後にスイッチを入れる。

のどかちゃんは再び叫び声をあげて着席してしまうが、その後また立ち上がって読もうとしてくれる。

本当に、のどかちゃんって健気だよね。

だからボクちゃんは敬意を表して、棒のレベルを上げていつてあげたんだ。

数も一本増やしてあげた。

おかげで朗読は遅々として進まなかったけど、授業終了まで根気強

く付き合っ
てあげたんだ。

……のどかちゃんを羨ましそうに見ながら、体を疼かせてしている29人を放っておいてね。

のどかちゃんが朗読し終わったのは、授業終了のチャイムが鳴る直前だった。

と、このような感じの授業を何回かして、放課後は女子寮へ。

その後は、寝室で、夕食で、お風呂で、また寝室で…。

魔法世界の時と同じようなことを、それぞれの担当の生徒たちとする。

全てが終わった後は、そのまま次の日の担当を選んで、一瞬で部屋を綺麗にする。

最後はもちろん、お休みの挨拶。

コリッ

[illegible]

これがネギ先生ことボクちんの日常である。

早くも課題達成。そして…。

あの後。

ボクちゃんは麻帆良での日常を過ごしながら、新しい生徒と本契約バクティオーする機会を伺った。

そして何かあるたびに、その状況を利用して本契約バクティオー。

そんな日々を繰り返したことで、千人という目標を軽々とクリアしてしまっていた。

何せ全校生徒2、331人中の1、000人だ。

魔法世界や魔法学校の経験に比べればチョロイものだった。

おかげで、3月の終わりには全校生徒2、331人がボクちゃんのものになりそうである。

予定の2倍にあたる人数。

それでも当初の予定より早く終わりそうだった。

「んちゅる、んっ、んっ、んっ、んっ」

そして毎日が情欲にまみれた生活。

気まぐれに色々な要求をしたり趣向を凝らしてみたりしたもの、それも直に飽きてしまった。

何せ魔法世界で暮らしていた頃とほとんど同じなのだ。

授業に関しても面白いのは、武装解除と契約執行、それに性属性の魔法くらい。

それも修学旅行が終わり、学園祭が始まる頃には全てマスターさせてしまっていた。

もちろん全て実践済み。

原作では学園祭の後は魔法世界編だが、この世界では名目上行き来できないようになっていた。

それに行けるとしても、わざわざ行く理由がない。

1億人の美女・美少女・美少女は、既にボクちんのものだからね。

しかも分身がエロエロな生活を送っていて、気が向いたらすぐに記憶を共有できるんだ。

分身の記憶は実体験として共有できるから、本当に行く必要がないんだよね。

だから学園祭が終わった後は、本当にやることなくあったんだ。

「ぶはっ、え？ ネギ先生！？」

ボクちゃんは今までやっていた事の続きを分身に任せる。

そして女子寮から抜け出して、世界樹の上空に飛び上がった。

.....。

麻帆良の街並み。

それは、しずなちゃんと出会った場所であり、女子中の皆と過ごした場所である。

立ち並ぶ家々には明かりがつき、そこには多くの人々の生活がある。が、その中の男性全てが、元の人と同じように自立行動をさせている分身だ。

目の前の男性が分身だと気付く女性は、1人も居ない。

.....。

さらに上空、大気圏の中で見下ろす世界の半分。

そこにも明かりがあり、多くの人々の生活がある。

が、その半分が分身だとは誰も気付かない。

それは世界中に生きる30億人の女性全てが同じだ。

だから、日本の裏側に行ってみても何が変わるわけでもない。

ただただ、張りぼての日常が繰り返されているだけだった。

.....。

それでもまだ、彼女らの子がいるんだ。

魔法学校で一斉にお腹を大きくさせている子もいる。

陣痛に耐えながら修行を頑張っている子もいる。

精力的に活動し続けているしずなちゃんも居る。

それにまだ、しずなちゃんとの子供を作っていないんだ。

そう思い、ボクちゃんは気合を入れなおす。

ちよつと鬱になったけど、まだまだこれからだ。

明日は修行の終了日。

残るも残らないもボクちゃん次第だから、ボクちゃんに残らない方を選択する。

正確には分身に残らせて、本体のボクちんだけ麻帆良を離れる。

魔法学校の先生や生徒、それにアーニヤなどの同期とネカネお姉ちゃん。

もう皆6ヶ月だから、お腹が大きくなっているはずである。

4カ月後、どのような娘が生まれるのだろうか。

ボクちんは自分の娘と色々する未来を思い浮かべながら、そのまま麻帆良の地を去った。

「そっぴゃ、最初は千鶴ちゃんを永遠の妻にするつもりだったのに……。なんかどうでも良くなっていたなあ……」

そんな思いを、口に出しながら。

100年後

あれから100年間。

何度も鬱になりながらも、ずっと続けてきた31億人ハーレム生活。

ある時はしずなちゃんと2人で過ごし…。

ある時は魔法世界の王宮で過ごし…。

ある時はメルディアナ魔法学校で過ごし…。

ある時は麻帆良学園で過ごし…。

ある時は中国、ある時はアメリカ、ある時はオーストラリア、ある時はアフリカ…。

いずれの場所でも、ボクちんは今まで通りだった。

一定の範囲や条件を決め、その範囲や条件に当てはまる全ての女性をターゲットに設定。

何かをすれば”都合の良い強制認識”が自動的に発動し、ボクちん以外にも色んな人が動き出す。

するとボクちんに都合の良い事ばかりが起きて、間もなくミッシェンコンプリートだ。

それはたとえ自分の子供であろうとも変わらなかった。

相手がしずなちゃんであることも、である。

.....。

しずなちゃんはボクちゃんと一緒に永遠の命を得た時、すごく喜んでくれた。

でもその頃から、意欲が少しずつなくなっていったんだ。

そして100年経った今日。

「死なせてほしいの」

そう頼まれて、しずなちゃんを消した。

意外と悲しいという気持ちがわからない。

まあ、それはそうか。

なぜなら、ボクちゃんも今や虚しくて仕方がなくて…。

しずなちゃんと、同じ状態だったのだから。

……。

その時、ふと……。

友達という名の下僕が勧めてくれた、非18禁の二次創作を思い出す。

その物語は、ボクちゃんのように何でもできる力を得た少年の物語だ。

それにも関わらず、少年は馬鹿で間抜けで、あまり力を使っていなかった。

だから、ボクちゃんには気に入らないことこの上無かったんだ。

その気持ちは、ボクちゃんが何でも出来る力を手に入れた後は一層大きくなっていった。

そして少年の行動に反発するように、エロ方面で力を使いまくったんだ。

でも……。

今のボクちゃんは、その気に入らなかった二次小説が気になって仕方がない。

その中の一文が、頭から離れない。

”怠惰極まる気楽な酒池肉林生活…でしたっけ？ それを実現してしまうと…”

”酔っばりばかりでボーっとしかできない毎日だわさ”

”麻薬中毒みたいです”

”そんな人生、幸せじゃねえだろ”

まさしくその通りだった。

やり始めた頃は楽しくて仕方がなかったけど、それはあくまで一時の快樂。

それは20年も続いたが、麻帆良女子中学校で修行を終えた頃には限界が見えていたんだ。

それでもこの生活を止めることができずに、全てがボクちに都合の良い環境で、ずるずると…。

それが虚しくなつて一度は”ボクちに都合の良い強制認識”を外そうと思った。

でも外したら、31億人の女性が怒り狂つてボクちを責めるかもしれない。

ボクちが魔法世界で権力者側だった女性にしたように、家畜にされるかもしれない。

長谷川千雨ちゃんや葉加瀬聡美ちゃんを雌奴隷にした時のように、強制証文で雁字搦め^{がんじがら}にされるかもしれない。

そう思うと、怖くて外せなかった。

いつの間にかボクちは、全てが都合の良い環境でないと生きられなくなっていたんだ。

そして同じシーンの続きが頭に浮かぶ。

” アナタの場合、自分でも気付かずに自分を不幸にしてしまう可能性があった ”

” 憶えておいて。過ぎた薬は毒となる。それは能力も同じ ”

本当に、その通りだ。

ボクちゃんは何でもできる能力で永遠の命を手に入れた。

それは人なら誰もが欲しがる究極のご褒美だけど…。

長く生きた今、ボクちゃんの心には空虚しかなかった。

ボクちゃんは世界中の男を殺しつくして31億人のハーレムを手に入れた。

それは男なら誰もが憧れる究極のハーレムだけど…。

今も肌を重ねている彼女たちでは、もうボクちゃんの心を満たせない。

ボクちゃんは『何でもできる力』という過ぎた薬を使いまくって…。

自分でも気付かずに、自分を不幸にしていただけだったんだ。

昔から、幸せとか不幸とかどうでも良いと思っていたけれど……。

今のボクちゃんは、虚しさを解消する幸せを、心を満たす幸せを、切実に求めている。

でもそれは、全てがボクちゃんに都合の良い今の環境を変えないと、永遠に得られないものだ。

そして環境を変えられないから、ボクちゃんの虚しさは永遠に続く。

それに気付いたボクちゃんは、もう死にたいと思った。

そして、しずなちゃんと同じように自分を消したんだ。

.....。

2103年7月30日。

一時期ネギ・スプリングフィールドを名乗っていた通称”ボクちゃん”が、140年の人生に幕を閉じる。

その瞬間、現実世界、魔法世界に存在していた全ての男性がいきなり消滅してしまった。

その後、残された女性たちは、生き残りの男性を探しながら真相の究明を始める。

そして調査を勧める中で、”ボクちゃん”の手記が発見され、真相が

明らかになる。

しかし、それは人類の滅亡を約束するものでしかなかった。

その後遺伝子工学の研究が盛んになり、女同士で子供を作る方法などが研究されるも、効果が無く…。

猿など他の動物との子供を作る研究も、上手くいかなくて…。

2124年、魔法世界が崩壊。

2208年、人間種が絶滅。

2578年、亜人種が絶滅。

人の居ない世界。

それが再び、始まったのだった。

最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話 完。

地球にとっては H A P P Y E N D ?

100年後（後書き）

ここまで読んでくれて、ありがとうございます。

クスエロ
今作の本編は終わりますが、気が向いたら番外編を投稿するかもしれません。

ですが、まずはここまで読んで下さったあなたに最終話の裏話を公開します。

裏話とかどうでも良いという方は、飛ばしてもらって構いません。

まずは終わり方について。

純粋なハッピーエンドを期待していた方には、本当に申し訳なく思っています。

クスエロ
そもそも今作は『劉奏のアンチ Ⅱ ボクちゃん』を否定する物語でした。

（劉奏とは作者の処女作『早すぎる転生物語』の主人公のことです）

そのため、ボクちゃんが不幸な結末を迎えることは、どうしても避けられなかったのです。

ボクちんの人生は劉奏が体験したかもしれない不幸な人生。

そんな位置付けだったのですから。

それでも何とかして純粋なバッドエンドにはしたくないと思い、最後に視点を変更。

そして『地球にとってはそれで良いのでは？』という問い掛けを込めて締め括りました。

環境保護の活動も、所詮は人間にとって快い環境を保護する活動ですからね。

それはとても良いことです。

良いことなのですが……。

何だかんだ言っても、地球にとって人間は病原菌のようなもの。

その事実だけは否定できないと、作者は思っています。

あと、今回の話で100年も飛んでビックリした方が多いかもしれませんが……。

飛ばしたのには理由があります。

それは今回の話でも書いたように、100年間の”ボクちゃん”が暗いことです。

しかもただ暗いだけではありません。

虚しい気分を発散するためにエロに走り、その後でまた虚しくなり、それを誤魔化すためにまたエロに走る。

それで回数を追うことに鬱々（うつうつ）とした雰囲気が増していく…。

つまり話数が増えることに暗さが増していく、ということです。

正直、そんな悪循環を長々と見せられても面白くないと思います。

それに、書いていても面白くありません。

このような理由から、麻帆良後の100年を飛ばしました。

改めてここまで読んで下さったあなたに感謝を申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

なお、同じ作者の完結作品として下記の3作がありますので、気が向いたらぜひご覧下さい。

?処女作『早すぎる転生物語』(<http://ncode.syosetu.com/n9540s/>)

間抜け・変態・臆病者と3拍子揃った少年が、恋姫無双とAngel Beats!の世界に転生する物語です。

クスエロ
今作を作るきっかけになった物語で、恋姫無双の世界では戦争自体を阻止してしまいます。

?短編『一晩で終わる聖杯戦争』(<http://ncode.syosetu.com/n3805t/>)

好きな能力を3つ貰っただけの一般人が、Fate/stay nightの世界にサーヴァントとして召喚される物語です。

しかしこの一般人、たった一晩で聖杯戦争を終わらせてしまいました。

?短編『世界一短い物語』(<http://ncode.syosetu.com/n7660t/>)

この作品は題名がそのままテーマになっている完全なネタ作品です。本当にくだらないことこの上ないですが、それでも良ければどうぞ。

【Tips】3種類の水着

ネギ先生になったボクちゃんが、初めて魔法学の授業をしたときのこと、憶えているかな？

あの時ボクちゃんは刀子先生に”あぶない水着”を着せて、のどかちゃんに”きわどい水着”を渡そうとしたよね。

ボクちゃんはこの2つの水着と”いけない水着”の計3種類を用意して貰ったんだけど……。

この3つの水着が、どんな水着か気にならない？

気になるよね？

っていうか、気にならないのなら飛ばしてくれていいよ。

今回はボクちゃんが用意した3つの水着の紹介をする。

【1着目：あぶない水着】

まず紹介するのは、ボクちゃんが刀子先生に着せてあげた、あぶない水着。

もちろん着せるときにセクハラしまくっていたけどね。

そのことは置いといて、今はあぶない水着の紹介である。

形状は、簡単に言えば潜水用の水着。

手は手首まで、足は足首まで、首はのど下まで覆っている、あの水着である。

と、これだけを聞くとどこが”あぶない水着”のか疑問に思つかもしれないが、説明はここで終わらない。

何と、最も隠すべき大事な3ヶ所だけが、綺麗に切り抜かれているのである。

加えて肩と肘の部分に仕掛けがあつて、どうやっても切り抜かれた部分を手で隠せないようになっている。

具体的に言えば、肩の部分は前後に、肘の部分は少しも曲げられないようになっているのである。

だから本編では描かれなかったけど刀子先生に”あぶない水着”を着せた時には……。

「じ、自分で着られますから……」

「ダメです」

「そ、そんな……あんっ、ふぁあっ」

という感じで、相手が抵抗できないのを良いことに大事な3ヶ所を弄りながら説明していたんだ。

だから武装解除エクセルマティオの説明を始めた時にも……

「このように武装解除は……」

「ひいあっ！　そ、そんなところ摘んでは、ひゃう！」

「……服を着せているだけなのに変な声を出さないで下さい」

「そんな無茶っ、はぁぁぁぁんっ」

「仕方ありませんね……」

「っ、……っ、…っ、っ、くくくっ！……！」

刀子先生の声が大きすぎて説明の邪魔だから、説明中には声を出せなくなるように念じた。

……と、そんな事があつたんだ。

それで気を取り直したボクちんがエクセルマテイオ武装解除の説明を再開。

こうして……

「エクセルマテイオ武装解除は先ほど刀子先生にしたように、相手の獲物を吹き飛ばして自分が攻撃されないようにする魔法です」

「そつかあ……」

「掛けたもん勝ちだね」

「なんか面白そう」

……と言う、本編の流れになったわけである。

つとと、いけないいけない。

話が脱線しまくったけど、ボクちんが用意した”あぶない水着”がどんなものかわかったかな？

”あぶない水着”は、競泳水着の3ヶ所が切り抜かれて、その部分を手で隠せないようにした水着である。

【2着目：きわどい水着】

これは宮崎のどかちゃんが欲しいと言った水着だね。

形状はいわゆるV字水着。

股から二又に分かれた生地が、直接肩に通される水着である。

その生地幅を短くして紐のようにして、大事な3ヶ所だけギリギリ隠れるようにした水着…。

それこそが、ボクちゃんが用意した”きわどい水着”である。

しかしこれだけでは上半身の2ヶ所の位置が水着のラインからずれてしまい、上手く隠すことができない。

そのため上半身の2ヶ所を隠す部分の裏には、洗濯ばさみのように強い力で挟む仕掛けが用意されている。

挟む仕掛けは目立たないように薄く作られているから、外から見ただけではわからない。

これで、ちゃんと大事な3ヶ所を隠せるようになるわけだ。

あ、大事なことを言い忘れていた。

この”きわどい水着”だけは、必ず本人よりも2サイズ小さいものが渡される。

その結果、どんなことが起きるのか……

……それはご想像にお任せするよ。

”きわどい水着”は上半身の2ヶ所を隠すための仕掛けがある、2サイズ小さいV字ヒモ水着である。

【3着目：いけない水着】

この水着は、上も下も大事な部分はしっかり覆っている。

しかも鍵まで付いていて、容易に取り外せないように出来ているんだ。

まるで胸当て鎧と貞操帯だが、その目的は身につけた女性の純潔を守ることではない。

むしろ逆で、水着の裏には様々な仕掛けが用意されていた。

具体的にどんな仕掛けが盛り込まれているかは言えないんだけど…。

少なくとも、入れる・震える・滲み出る・搾り出す・遠隔操作という5つの要素はある、とだけ言っておこう。

正直ヤバすぎて、具体的に仕掛けの内容を書くことができないのだ。

何せ形状を見た途端、皆が揃って敬遠した水着だからね。

まだ初めてを迎えていない娘たちは特に嫌がっていたね。

その嫌がりようは、朝倉和美ちゃんと柿崎美砂ちゃんが協力しても、友達に身に付けさせられなかったほどである。

それでボクちゃんが2人に”いけない水着”をセットしてあげただけど……。

まさか2人とも経験が無かったなんて思わなかったんだ。

もったいない事をしたものである。

つとと、いけないいけない。

また話が脱線しまくったから、話を元に戻すとして……。

何にしても、おそらく考えうる仕掛けをこれでもかと詰め込んだら
”いけない水着”になりそうである。

以上、3つの水着の紹介でした。

のどかちゃんが”きわどい水着”を選んだ理由、わかったでしょう？
ぐふふつ、勿論のどかちゃんには全部着てもらったけどね。

特に”いけない水着”を1週間ずっと身に付けさせた時といったら、
もう……。

つとと、いけないいけない。

それはまた、別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3362t/>

最強になったゴミクスがエロ方面で好き勝手しまくる話

2011年6月16日05時13分発行